

中華帝国の領域をどのように認識するかは、現実の支配と理念のすりあわせを求められる微妙な議論をはらんでいる。古来よく知られているのは、漢族の居住域を中心に文化の華さく「中国」を設定し、その外を「外国」として区別して、「中国」から「外国」に徳が及ぶと説明する考えである。これとは別に、「外国」の一部に属国を設定し、それを統治域に組み込む考えがある。

後者の場合、一般に漢族が中心であることを前提とする「中国」の中に、漢族だけでなく異民族を包み込む議論を内包するものとなる。その議論は、いわゆる征服王朝が漢族を含む複数の民族を統治する体制として、歴史的に遡っていくことができる。論文提出者は、この問題意識を唐代に遡り、当時の中国の中に居住する異民族の動静を、丹念に検討した。

白居易の「陰山道」と元稹の「陰山道」を比較し、前者について通常語られている意義とは別に、両者に共通して、回鶻への非難の強まりの前に、本来追求されるべき為政者たちの責任が隠蔽されてしまうことへの危惧がある、という意識の存在を抽出したことは、審査委員の関心をひき、高く評価された。

論文提出者は、この白居易「陰山道」、およびこれとともに唐と回鶻の絹馬交易の性格を考える上での基本的な史料とされてきた『旧唐書』迴紇伝などに見える「乾元・大暦の交易に関する史料」が、いずれも特異な意図をもって記され、そのまま事実としては用いがたいものであることを問題にし、さらに、唐と回鶻の交易の拡大には監牧体制の崩壊という唐の馬政の変化が大きく関わり、その交易が唐財政の影響下になされたことを論じた。

富裕化による回鶻社会の変化を「征服王朝」の萌芽と見るならば、その回鶻と唐とが双方向的依存関係で結ばれ、絹馬交易が回鶻社会の変化をもたらす一因となったこと、そして、それが唐朝の馬政や財政と結びついていたことは、あらためて注意を喚起する必要がある。こうした広い問題意識から検討を進め、かつ細部においても緻密な考証をこころがけた業績として、評価することができる。

以上から、本審査委員会は、本提出論文をもって、博士（文学）の学位を授与するに値するものとの判断をくださった。